い樹皮を持つため、多少の火災には耐えることができる。また、伐採してもひこばえによって容易に再生する。

十勝平野では、旧石器時代と草創期からの縄文時代を含めて人間活動の痕跡（石器・土器・装身具など）が各地から多く発掘されている。カシワやミズナラおよび混在して生育するトチノキなどのドングリは野生動物ばかりでなく人間の食料としても利用されてきた。

またアイヌ民族は狩猟・採集ばかりではなく1000年以上前に北海道、東北地方北部に分布する擦文式時代から稗、粟、ソバ、緑豆等の栽培を行ってきた。そのため縄文人やアイヌ民族の人々は火入れをすることによって、カシワ・ミズナラ林を里山として維持するとともに、居住地の周辺に農耕地を確保してきたのではないだろうか。カシワ・ミズナラ林は先住民の広大な里山であった可能性がある。

本土入植者が伐採

明治中期以降に本土から入植した人々は、カシワ・ミズナラ林のほとんどを伐採し畑にしてしまった。開拓してからしばらくの間は無肥料で特に豆類を中心とした作物を収穫することができ、第一次世界大戦の際には「豆成金」と呼ばれるような商人も現れた。

しかし、年月を経るに伴い黒ボク土の上に作った畑の地力は低下し、黒ボク土を生産性の低い「特殊土壌」として扱わねばならなくなった。